

マルクス主義戦線

発行：マルクス主義戦線委員会

連絡先：東京都文京区西巣鴨町10 三枝方 毎月 郵

NO5

定価100円

1963. Ⅷ. 13発行

内容

★マル同中核派のシレンマと

“新左翼諸潮流の思想的混乱について

——オの回原水禁大会をめぐって——

(秋本道夫) ……1P

★マルクス主義戦線オ三号によせて

(N・K生) ……8P

★(附録) マルクス主義戦線主催 夏期研究会レポート集

① ドイツ資本主義の崩壊とナチス絶命 (木沢史郎) ……11P

② オ一英大戦からオニ英本戦に至る政治史 (D.N.I) ……16P

③ ニューディール政策から戦争経済へ (H) ……20P

④ 戦後の世界恐慌 (岡合一郎) ……22P

⑤ 世界資本主義の崩壊の段階としての帝国主義
——戦後の世界資本主義—— (杉村春一) ……24P

⑥ 研究のテーマ一覧 ……25P

ーリニズムによって根深く汚染されていることにあるのであり、二の汚染からイデオロギー的に、組織的に脱却した革命的防衛者を作らなければならないことは、革命運動の革命的立場は決つてあり得ないことを自覚することの中に、我々の斗いの出発点があり、眼目があったのである」(解放N.0.1)といふ向う意識と決定的に敵対するものであり、まことに我々から見れば快いものである。黒田哲夢が人間の危機から出発して、一つの体系を形成し、スターリニズムのマンチホはなかったが、マルクスとは異つて資本主義を分析することができず、その理論化は行く、論理の歴史化を行い、結局、観念論に転化してしまつていふのに対応して、現実の階級闘争を超越してしまつたとき、マルトウ中核派は、ついに主眼を置いて、一八〇度の転換を強いられているのだ。言うまでもなく、彼等の反戦闘争は、米ソ核実験反対を置いて、反帝反スタ細積を直接闘争するのである。だが、この細積こそ、大管絃闘争という、日本のマルトウアジールの現実の攻撃の前には、全く破壊せざるを得ない。従つて、反帝反スタ論は更に、ほり下げて、維新の山ねはなすなりもの

いを革命的に処理するの、敵階級への妥協によつて処理するのの二つに一つといふことである。更に、この二つに一つといふことは、中口井権党に属する限り、国内政策として前者を取らうという方向性が感ぜられるばかりでなく、中ソ論争の根本的問題として「世界の人口の三分の二を占める未解放人民が、反帝反共、革命を拒むことによることが必である」といふことを認めると、認めないか」といふ提記を行つて平和共産への決定的対決を遂行してきているという事実であり、与や、中口官権が、自らの利益のために、世界革命を重切らうとされているほどは、是れを言えなければ、同次限で語ることは、まずまず愚劣を極めるものである。むしろ重要なのは、「平和共産と経済危機の時代」というフルミチヨフ、トリアツチ補佐階級に対する批判から、我自身の世界観と方針を持つことか、オーに重要であり、言うまでもなく、そのは「現代は、戦争と革命の時代である」といふ現実である。目次の反米民族主義に對しては、世界資本主義論の中の日本資本主義論を置いて「自由党の主義の打倒」を提記することである。二山等はいろいろ

であつた。あいや二山等の理論的粉飾があるにせよ、二の反帝反スタ世界観は、スターリニズムといふ日和見主義が中ソ官僚制という物質的基礎を持つていふといふ認識に裏付けられているに、さか、ゆらぎ、ソ連中口社長がその一体、資本主義が社会主義かといふ根本問題には、黒澤を解答せず、且、没階級的な観念であつた。以て、三、日本の日和見主義の物質的基礎が外にあり、その存在は考へられないことであるが、最近の中ソ論争の過程は、この向うにも新しい照明を与えており、反スタと世界観の破壊を更に裏付けている。すなわち、中口書簡(六月十日)によれば、至人民の党とが、至人民の国家はあり得ず、奴才を尊厳し、Eのトロレタリアートは、トロレタリア独裁の中で、その後さへ現在さし、ます革命を押し進め、ゆがゆがはなすに、いふや、ユーゴ共産主義者同盟は、マルトウアジールを志すといふのである。ユーゴに見られる革命は、ソ連にこそ、同様に見られるであろう。二のことは、Eと之、トロレタリアートが一口に於て奴才を擁護してこそ世界革命の勝利の日までは、国内階級闘争は決つて細くならぬのであり、向うはそ

最近彼等が、やり直したといふ官僚闘争の態様である。最近の「前進」と今回の「全労連総決起宣言発表」は、「浪花

日本の資本主義分析を正しく行い、その上に運動の出発点を求めるといふようなものではなさそうだが、彼の言葉でいえば「段々ありていくより他にない」といふ。下部へ根へ、花咲かぬところに「不有の母」があり、存在の原点があるという。あるいは「前衛的思考の対極にあって、いわば反前衛の極と考えられる地点に倒錯した最も高次の反動思想があり、そのゆえにそここそ進歩思想の発生源であるような極小の場を設定することによつて前衛は自分自身の眼を獲得する。「私はそれを席点とよんできたけれども、それは今日流行している実体的な対応とは、およそ視角を異にしている。」

人間の心の奥にひそんでいるような或いは現代的な擬似市民主義的な外観におおわれている土着のエネルギ―原思想のようなものを仮につかんだとしたらそれをいかなる形で発展させたらいいのかといつたことには雁はふれていない。
三号の主張は雁のそのような思考はかえりみず、前衛党の役割、階級意識の注入、正しい戦略、戦術の対置をもつてくる。だから両者は基本的なところがかみ合っていない。次に一歩譲って現代のアナーキズムの意味を考え直してみる必要がある。いうまでもなく、アナーキズムで最初から最後まで押し通そうなどと考えている者は本物のアナーキスト以外にはないであろう。

とて今はまた眼がない。従つて、自分がどこにいるのかも又何をしているのかも、時間的、空間的に限定された中でしか理解できない。だから彼の指導する大正行動隊（退却者同盟）の運動にしても自らその制約をうけている。そして一方では現在はまだ眼のもつてぬ時期と規定しているのではないだろうか。だから谷川雁がアナーキズムであるとは批判しても、彼のボネを攻撃した二とにならぬ。彼の日本人の思想や意識を一度二度もいつて何かアリミテなケルンと求めようとするといつた観念にこそ問題があると思う。ラッポの皮をむくような喜劇になりかねない仕事に对してだ。

別れくさい顔をしてあり、陽気なあやべりクルーである構改革が多少のものさばっているような状況においてアナーキーな発想法、運動形態、思考様式は、きわめて貴重なものだと思うのだが、出発は暴動であることは一向かまわないのだ。そしてそのような暴動が一度でも日本におこつたことがあるのか。（戦後において前では希騷動があるが。）

もう一つ、前衛党といふものは、その果たした機能によつて具体的にその思想にまでさかのぼって評価されるのだが現在、そのような組織は、いかなる機能を果し得るの

か。それも全て、日本資本主義の全体的把握からくるのかもしれない。しかしある情況では革命的前衛など存在しえないような時点もあるのではないだろうか。現在はそれとせらられたとはいえ、年額二億マルクに相するような時期からぬけ出しつゝあるのか、それともまだか。

【研究会レジュメ】

ドイツ資本主義の崩壊とナチス経済

水原 史郎

一九二九年に三〇〇万、三三年に六〇〇

の復興過程には、巨大なアメリカの生産能力も十分振り向けられるであろうことは期待されて然るべきであった。かくしてアメリカのドルはとうとうとしてドイツに流れ

たのである。ドイツ資本主義の再建は総額

一三億マルクにのぼるアメリカ資本によつてまかなわれ、又賠償もこのアメリカ資本がふりかわったといつても過言ではない。

ドイツにとつてはマルクを維持しつゝ賠償に応ずるには何としても輸出を極度に高め、その出超額の範囲内に賠償額をおさえる必要があった。二〇年代の全過程はこのプロセスが当の米、英、仏の競争で輸出が頭うちし、結局は米資本の流入によつてバ

つて一挙に事を理めしつてはなかり。それは二〇年代において一貫して累積されてきたつゝもあつたのである。

ドイツ案によつて実行しうる額に依拠する賠償はドイツ資本主義にとつて巨額であつた。つちなみに一九二八年に於ける輸出一四億マルク、輸入一三億マルク

この賠償は、その数字こそ当初の天文学的数字がいく回かの改ざんをうけ、変動をうけるのであるが、然し、この賠償こそ単なる仏、英の恣意的な要求によつて提出されたものではなく、仏英の対米債務を清算する唯一の手段として考えられていたのが、然し、輸出能力をつけるための産業合理化は二〇年代に強烈に推進された。

そしてその結果、二五年以来、失業労働者は絶え間なく累積されることとなるのである。

二九年恐慌に対して社会民主党ミューラ内閣は全くのレッセゼールであつた。彼らは「反インフレーション、反デフレーション」という消極的な言辭を奉じて政権の最後まで無策で通した。均衡財政の維持、そしてインフレーションの拒絶は明らかに通貨の金価値の維持、という一点に凝縮していたのである、マルクが金本位にのつたか、ついでるか否りは恐慌も自動的に回復しついでくと

して疑っていなかつたのだ。だが二九年の後半には資金の欠乏、租税収入の減収は著しく、政府は公務員の給与を削減するために金をかりねばならない程であった。ヒルファーリンクはドイツ諸銀行から貸付けを得ようと狂気の如く努力している時、国立銀行統裁シハトは国立銀行が政府に対して資金調達に協力する前提として最後通牒を提出した。ここに一八年以来ドイツ金融資本家と社会民主党の甘い生活は終わった。シハトはナチスにはせまじ、ナチスは固く金融資本家と手を握ることとなった。

このミュラー内閣(社会民主党)の崩壊後、成立したブリュニング内閣は公務員の賃スローガンを採用していっただけであつた。社会民主党が全くの無策で、金の魔力にすがつていた状態であり、共産党がナチスを打倒してその屍の上に社会主義権力を樹立する具体的政治方針が不明瞭であつた以上、権力は政権奪取を具体的に準備していたナチスの手にころがりこんだのはあたり前であつた。

かくして資本主義がもはや商品として処理することが出来ず放置された大量な労働力は労働力の討画的な社会主義的配置という計画経済の内部において解決されるというのではなく、強力な国家権力を背景にした暴力的な配分によつて強制的に商品化さ

実施した。これは国内価格を圧迫し、輸出を伸張させることによつて脱出を計ろうとするものであつたが、これはドイツアロレタリアートに塗炭の苦悩を強制するものであつた。沈痛なデフレーション下に工業活動は更に低下し、その結果失業者は六〇〇万人に達した。ナチスの得票は一挙に八〇万から六〇〇万に達し、共産党も三五〇万から五五〇万に達した。就業者は失業者を失う位な勢は死んだオカましたと考へていた。だがこの時においてすら社会民主党はブルニングの政策に「寛容」をもつて容認する態度でのぞみ、共産党はナチスのプロパガンダの効果が高まれば高まる程、それされることとなつた。これは巨大なカンフクの中での商品化であつた。

今や我々はまさに資本主義の本性が赤裸々に露呈した二九年以来のドイツ経済の展開を検討しなければならぬ。

参考文献

◎世界経済論 (易井 編)

第一篇 第一章 概観

◎ヨーロッパ労働運動の悲劇

(シムルム、タール) I

第九章 ドイツ社会民主党の寛容政策

以上二つは夫々三〇頁くらいあつて、必ず精読してあいて下さい。

七頁より続く)

のあつたに於てあつた。即ち、我々は、あくまで、保平争を爲めて許すは、現存保持の武蔵に解すは、三島の理論的論議から出発せしめらるべき、そのことは、この直ぐ、華野諸國の近隣と精進改良を期して、他方「現代は戦争と華野の時代である」といふ見解を主張せしむることの全面的検討である。

八月六日、反帝平和集會をめぐり思想状況は、以下一切の問題を提議して解決を今后の委ねた。南西アジアの諸國「核戦争による人類の危機論」(橋本ノボ)は、現実には「露田在野論」(又野ノボ)文論「」と「精進改良論」(田代)の、そのは「日本陸海軍等の現存から出発せしむ」(同上)とは、木の曲の曲き関係にあるべきもの、折下りの、同一政治論議の内の問題を可く「平和共産」してゐるの、そのまゝを表現であつた。

かくて、赤紅的集會の道は、現在の華野敗北期に於て、山下大佐の戦争の容易な論争得たこととを争つて、困難であることとを告げてゐるが、我々はこの情況に「一歩一歩解決」の道を示すことを公約を宣言する。いふまでもなく、そのは、出発

レニニメ

オ一次大戦からオ二次大戦に至る政治史

D.N

オ一期 战后処理の時代(二〇年前后)

◎ヨーロッパ

対ドイツウエルサイユ条約にはじまつて対トルコのセーブル(最終的にはローザンヌ)一条約に至るまでの過程。殊にウエルサイユ条約が問題の核心になる訳だが、非常に特徴的なことは戦勝国側が敗戦国ドイツに対してかつてない程の圧迫を加えた形をとりつてゐること、就中フランスは終始強圧的態度をとつていつた。(例えば、ポーランドドイツ間の国境問題に際して)

◎近東およびアフリカ
この地域で重要な事は、旧トルコ帝国領と旧ドイツ領(アフリカ並びに太平洋諸島)に対する委任統

りして論議的なるあり、又、政治的なるものである。かくて、華野共(一)は、在野敗北後の現存は、林々の問題意識の存在する華野共の政治論議の生かすを得たこと、華野共政治主義の下では、華野共の解決の得たこと(二)とを知らせてゐることである。

(以上)

治方式の採用とイラニとである。これによつてドイツの植民地は全く失われ結果となつた。又、英仏は旧トルコ領のイラク、シリア等を夫々獲得した。

◎極東

日本はこの向急教に拍頭、旧ドイツ利益の膠州湾を獲得し、又、赤道以北の太平洋諸島を取つて極東における一大勢力となつた。ために列強、なかでもアメリカ、イギリスは非等々脅威を感じ、二十一年ワシントン會議を召集して、四ヶ國、五ヶ國、九ヶ國条約の三つを締結、極東および太平洋における現状維持に努めると共に日英問題を解消させて日本に対する憤懣を鮮明にした。

オ二期 強制の時代(二四年)

◎フランスをめぐる同盟関係

フランスはドイツに対してもつとも脅威を感じて
いたのだが、ドイツの敗戦という事態に即して極力
これを利用して自己の優位を形づくろうとした。安全
保障体制は、しかし、各国の思惑もあつて成功せず、
主として他の欧州諸国との間の同盟関係を醸造する
ことに向けられた。その一つは二十一年のフランス
・ポーランド同盟条約およびこれに附属する秘密軍
事条約であり、他の一つはチエコスロヴァキア、ル
ーマニア及びユーゴスラヴィアの所謂小協約諸国と
の政治同盟であつた。

この二つによつてフランスの欧州内における地位
はきつめて強固になつたのである。

④ドイツの苦悩——賠償と非武装化——

連合國の手に存る賠償委員会の要求額は、あまり
にもドイツの支払能力を越えたものであり、引續い
て起きた通貨危機はドイツの惨状を拍車をかけた。
こゝでもフランスは強硬な態度を示し、二十三年ベ
ルギーと共にルールを占領してドイツに賠償の履行
を迫つた。しかしドイツの逼迫さは誰かが認めるこ
ころであり、その再建の爲に、ドーズ委員会とリュ
トレーゼマンの登場は、大きな意義をもつて了。

⑤その他の欧州情勢

は実収を握り、一國社会主義論を以つて戦勝を規定
し、ソ連の過渡的なるものとしての國家は次第に固定
化されて了つた。

才三期 協調の時代(二四—三〇)

先ず賠償問題はドーズプランによつて促進された。
そして結局賠償の問題も賠償を得た金を英仏がアメ
リカに支払うという形をとつて了つた。従つて賠償
及び連合國戦債の支払の全枠は、アメリカの投資
家或は投資家がドルをヨーロッパに彙前よく投する
か否かにかゝつて了つた(E・H・カー 134 P. 1) ので
ある。

一方もう一つの欧州の眼であるフランスは、二五
年ロカール条約によつて一応自國の安全保障問題を
解決することができた。

更に、大戦後ウイルソンの提案で作られた國際連
盟が、この期間かなり有用され小國間の紛争の調停
委任統治などがその自立した活動だつた。

才四期 恐慌の時代(三〇—三三)

アメリカ金融市場の崩壊は直ちに欧州に影響を与

オーストリアは「元来ト...」
であつたが、連合國側は、巨額の援助借款を与えて
これを独立可能にさせ、更には、他國と自己(オース
トリア)の獨立を危うくするような条約を結ばせ
たり約束させた。これはいづれも、ドイツとの再
合併を欲しむところから連合國側がとつたもので
あつた。

一方イタリアは戦勝國の一つでありながら、獲得し
たものはさしたるものがなく、ロンドン秘密条約に
締結された領土の拡張も、一部は強引に認めさせた
が、アフリカに關する植民地の拡大等は依然認めら
れず、イタリアはフランス・イギリスは妥協的に強
引不満をもつた。国内には騒然とした状態が戦後引
續いて了た矢先、一九二二年十月、ムッソリーニの
率いるファシストが政権を獲得。直ちにギリシヤを
挑発して戦端を及ぼすなど、イタリアのファシズム
は以後二十余年間流けられることになる。

最後に地球上最初に樹立されたソ連だが、当初ソ
連は世界革命の爲めにさまざまな手を打つた。イギ
リスにおけるゼネストの指導などもその一つであつ
た。しかし、二十四年レーニンの死以来スターリン

は、ドイツはドル使統のストツプのため賠償を支
払えず、又英仏は、賠償が取れなため債務が払
えず、各國は金の輸出禁止の措置をとらざるを得な
くなり、國際貿易は極度に縮小して了つた。

⑥ ドイツではその影響がもつとも激しかった。戦
後続いたインフレは、外債の差入を除いても可能な
だけの準備金を残すべくもなかつた。さうに貿易
の全般的縮小は当然ドイツの輸出を急激に減した。
又、ドイツが窮余の一策として試みたオーストリア
との經濟的連環はフランスの挫折にあつて失敗した。
さらして国内は混乱はし、ナチ及び共產党は著しく
抬頭した。

⑦ その他の國でもフランスを除く全欧州諸國が金融
的に悩み次第と金本位制を停止してブロック經濟に
移行し、經濟的ナショナリズム政策に転じた。とし
て一九三三年のローザンヌ會議は賠償および戦債に
終止符をラフニとつけた。

⑧ 日本は同じく經濟的打撃が大きく、軍部の抬頭が
激しくなつてきた。三十一年遂に滿州事変が勃發、
直ちに日本軍は滿州を征服した。これにより極東お
よび太平洋の情勢は極めて緊迫化したのである。

才田期 戦争への再突入の時代

(三三三—三三九)

①ドイツスロレタリアートの敗北の上に、ファシストナチは全権力を掌握し、軍備の強化、国内治安体制の確立を行つてゐた。

これに對抗してソ連はフランスと三五年に相互援助条約を締結したし、又並に、オーストリアではこれに應じて講和団とリウファツレヨ的団体が勢力をもちてきて、イタリアがこれを援助した。

②ドイツは遂に三五年、ウエルサイユ条約を破棄し、再軍備を宣言した。同じくイタリアは、エチオピアに對して公然と侵略を開始し、その全土を征服した。極東では中国および太平洋をめぐつて、日本とアメリカの対立が激化の一途をたどつた。そして三十九年ドイツはチエコ、ポーランドに侵略、直ちに英仏は宣戦を布告した。

へ文献 V

E. H. カール、両大戦間における国際関係史 (一九四七、訳本…S三四年 弘文堂) (以上)

(一五七)

へ戦後世界資本主義論に関する文献V (九) 資本主義の歴史を、世界資本主義の必然的展開過程として捉える理論的観点については

①岩田弘、現代資本主義と国家独占資本主義論(経済評論六三年六月号)

②岩田弘、宇野理論の根本問題(商経論集才一巻才一号)。

③楊井、世界経済論(東大出版会)

④又ルウセ、国際通貨(東洋経済新報社)

⑤現代帝國主義講座II 現代帝國主義の運動と展開 (日本評論新社) ⑥経企庁、世界経済白書。⑦國際通貨問題につりては、⑧牧野、円・ドル・ポンド、⑨ハロッド、現代のポンド、⑩同、ドル、⑪國際決済銀行、スターリング地域。その他最近の新聞。

(以上)

ニューディール政策から戦争経済へ

(レジメ)

(M)

(一)ニューディールはルーズベルト大統領が就任した一九三三年三月から三九年の戦争経済政策への転換までの七年間続けられた。その間三度の変化がみられる。がニューディールは政府の公共投資で国内市場を拡大し、景気の上昇をはかるものと見えよう。

一方ルーズベルトは金條を直し、平価切下げを武器に各国に立ち向うことになった。これにより世界経済の崩壊は決定的になった。そして諸列強は経済スロウダウンを形成し、市場を分割斗争に入つた。米国の景気は底から脱出したが、三七年の後退と西欧の緊張の激化は、米國も軍事経済への傾向を強めた。才

二次大戦の勃発とともに米國は連合國の兵廠と化した。戦争と軍事経済が米國を不況から脱出せしめ、戦後の世界を支配するに至る驚異的發展を可能にしめたのである。ニューディール政策は国内の景気を若干は回復せしめることは可能であったが、崩壊した世界経済の中で自國の経済発展をなすとげるとは不可能であった。

(二)ニューディールの内容と効果

①二五年半頃——購買力の補給、消費力の拡大、投資の増大、インフレ政策の採用、消費手段部門への投資。公共投資は社会救済費が中心。

②Rump-Raising Policy (三七年末)——最初の救済的性格をもつた公共投資が私的投資を誘発した。景気の上昇、國家信用の膨張に對して私的投資は低調、三七年の後退。

③三八年春——ささいな水政策的政策の一端。公共投資は本格的、独立的になつた。公共投資は生産手段部門に積極的におこなわれた。軍事化の傾向。

④ニューディール政策から三七年後退に至るまでの景気回復の内容、三七年後退に至るまでの景気回復の内容、三七年後退の内容、軍事経済化への傾向。

⑤ニューディールは完全雇用をなしえず、過剰生産能力を運転できなかった。「景気の上昇」は産業の昂揚はないが、景気でもなるといふのが現実である。

戦後の世界経済(レジメ)

河合一郎

I 1946

ドルの圧倒的優位、金の吸収
 IMF体制の成立—ドル・金本位 (ブレトンウッズ)
 マーシャル・プラン(47)

II 50~57

朝鮮戦争。経済援助→軍事援助
 56~ 設備投資ブーム(日本,ヨーロッパ)

III 58~60

ドルの絶対的優位の解消
 58. 欧州各国の通貨交換性回復
 59. EEC結成

IV 現在

アメリカのドル防衛—通商拡大法、金スール、スワップ協定
 EECの拍頭、イギリスのEEC加盟問題とスターリングブロックの解消。
 IMF改革案。貿易自由化。

(三) ① 経済ブロック化の進展、軍事聖者化、ヨーロッパの対立激化、才二次大戦の勃発、米国の軍事聖者化、三十八年年度教書、新ウインソン海軍拡張案
 ② 中立法改正(四〇年)から武留貸与法(四一年三月)の制定をみて米国は連合国の兵器廠と化した。
 武留貸与法を契機に戦時聖清運管諸材料関の組織により、戦争聖清に突入した。
 ③ 才二次大戦は軍需を中心として市場の際限なき拡張、過剰資本と過剰人口のたうちまうの解消、戦争中五年間(三九から四四)に生産力の二倍以上の増加をもたらしした。聖清生産力の増加の実体。
 ④ 二の驚異的発展の要因。
 (a) 膨大な遊休設備の存在
 (b) 三〇年代に資本構成の高度化が進められていた。
 (c) 過剰労働力の存在
 (d) 国防支出を通じて統需要が汲及的に成立した。
 (e) 産業における組織化、独占が行われていた。
 (四) 軍事聖清の内容
 四一年秋頃には遊休設備はフル稼動し、限界に達した。武留貸与法の成立と、米国考戦がせまっていたので、民需生産の圧縮と軍需生産の新規拡大が進

められた。
 民需産業の転換の実体。
 新規設備投資の内容。独占の利益。
 (五) 国際収支、貿易。
 本とドルの角逐。武留貸与をめぐり米英は真向かう対立。IMFの成立とドルの勝利。ドルがIMFを通じて国際通貨システムの中軸として、国際的にその優位を確認した。
 (六) 労働運動
 CIOの成立。CIOの斗争。戦争協力。
 <文 献>
 ① 楊井、『世界聖清論』(東大出版会)
 ② 神野、『戦争とアメリカ資本主義』
 ③ ホイヤー、モレーズ、『アメリカ労働運動史II』(岩波)
 ④ フォスター、『アメリカ合衆国共産党史(下)』

